

西遊記研究

——三蔵法師一行の変貌——

武者 晶子

はじめに

『三国志演義』『水滸伝』『金瓶梅』と共に四大奇書と称される『西遊記』は、歴史的事実である玄奘三蔵の事蹟を基にしてはいが、著しく現実離れした筋を持つ作品である。

唐朝太宗の治世になされた玄奘の偉業は、後世に語り伝えられる所となり、更に多くの民間伝承を吸収することで内容を一層豊かにしていった。宋代には説話人の題材とされ、また『西遊記』の原型の一つ、『大唐三蔵取経詩話』があらわれる。孫悟空の原型である猴行者が登場して、三蔵法師一行の道案内役を務め、沙悟浄の原型とみられる深沙神も顔を見せるがこちらの方は供には加わらない。猪八戒と、玉竜の変じた白馬は姿を見せず、観世音菩薩の代わりに毘沙門天が守護の役割を果たす。

その後も次第に内容を増し、形を整えたが、一方史実からは離

れていく。そして明代中葉、百回本としてまとまり今日に至っている。作者は呉承恩であるとされるが定かではない。^{注2}

小説『西遊記』は元代に既に成立していたと考えられているが、このテキストは断片的に伝わるに留まっている。まとまった形で伝存するのは、明代以降の刊本である。これは文章の詳しい繁本と、繁本を底本として簡略化した簡本とに分けられるが、ここでは明代繁本としては最も早い世徳堂本を基に清代諸本によって世徳堂本にはない玄奘出生物語を付録として加え若干の校訂を施した人民文学出版社版（一九八〇年）をテキストとして用いることにした。本稿における考察に際しては、最も利用しやすいテキストと考えられたからである。本書は次の五つの部分から構成されている。

第一回～七回 孫悟空の生い立ち

第八回 観世音菩薩の東行

付録

玄奘出生物語

第九回～十二回

唐太宗入冥記

第十三回～一百回 取経の旅

『西遊記』の主題については人民共和国内成立後、第一回～七回の大開天宮と第十三回以降の取経の旅における、孫悟空の神仏への対応の違いに注目することによって、階級論に結びつけて論じられた。^{注4}その後、階級論を離れて作品を見つめ直すという動きが見られるが、主役である孫悟空に焦点を当てたものが多い。^{注5}

本稿では三蔵法師一行という集団を中心に、第十三回以降の取経の旅に絞ることによって、作品を捉えなおしてみたい。そもそも『西遊記』は第十三回以降が基となり、そこから派生して孫悟空の生い立ちや玄奘出生物語、唐太宗入冥記といった部分が形成されてきたものと見做し得る。そこで第十三回以降の検討を通じて、なぜ前記の部分が加筆されなければならなかったのかを考えるならば、そこから作品の主題に近づいていくのではないかと思われるからである。

一 三蔵法師

先ず始めに、三蔵法師一行の代表者ともいえる三蔵法師・孫悟空はどのような形象であるかを考えておきたい。

三蔵はその名を玄奘といい、唐太宗の時代、貞観三年(六二九)から同十九年(六四五)の十五年余の長きに亘り、インドへ經典の原典を求めに行った。実在の玄奘は意志の強固な立派な人物であつたに相違ない。しかし、『西遊記』に描かれている三蔵は、それとは対照的に、優れた僧ではあるが融通がきかない上に頼りなさを感じさせる形象である。鈴木陽一氏はこの点について、「独立した人格であるより、むしろ舞台の背景にも等しい存在である」とし、三蔵は背景としての役割を果しているのだと指摘している。^{注6}しかし、妖怪に会っては無力この上ない三蔵ではあるが、人間を相手とすれば尊敬の対象となり、それは弟子の遠く及ばないところである。そこに三蔵独特の魅力がある。このような場面における立場の逆転に注目すべきであろう。

取経の旅以前、太宗によって水陸大会の壇主に選出された三蔵は、大会の、人間が冥界の鬼を救うという主旨からいって、人間の代表者としての地位を獲得したといえる。ところが、西界山を越え、妖怪の世界に足を踏み入れると同時に、主役の座を悟空に奪われ、無力な存在となってしまう。これは、三蔵が第一人者たり得るのは人間世界に限られるからと考えれば理解できる。彼は非人間世界においては、妖怪の目からみれば不老長寿の薬にすぎず、神仏の目からみても更生させるべき人物でしかない。^{注7}

これは要するに、三蔵を人間の中で最高の人物として賞めたたえると同時に、人間三蔵という面を強調しているのではなからうか。いかにも無力な面を前に押し出すことによって人間である事を強調し、非人間世界の中では未完成な人物であることを示唆しているのだろう。取経の旅路で非人間世界における第一人者である孫悟空とぶつかり合い、また支えあい、^{注8}凌雲渡に至って目出度く凡胎解脱することになる。三蔵は前世金蟬子といって釈迦の弟子であつたが、説法を聞かなかつた罪で東土に転生させられていた。それが凡胎解脱によつて西天に復帰できたのである。

いいかえれば『西遊記』における三蔵の旅の意義は、大乘經典をもたらすことで冥府の孤魂を救うべく催された水陸大会を成功させ、それと共に人々をも救うことであつたとはいえない。彼の西天への復帰は無自覚のうちになされたものではあるが、そもそも西天に経を得ることのできる資格の獲得こそが、同時に西天復帰の資格の獲得にもなっているのである。結果から見れば、彼の旅の目的はむしろそこにあつたとすらいえるのである。そして作品中における三蔵の旅路の意義とは、東土に經典を持ち帰つたという結果の中ではなく、むしろ、人間の最高の地位から人間超越へという過程である取経の旅において、人間三蔵から凡胎解脱に至るまで、出身世界を異にする弟子達と互いを高めあつたとい

う行為、そのものの中にあつたとはいえないか。

二 孫悟空

実質上の主人公である孫悟空は、封建社会中の人民の反抗闘争の英雄、^{注10}封建統治階級内部の進歩的人物、^{注11}また第七回までの大鬧天宮と第十三回以降の取経の旅の、神仏との関係の変化から、被統治階級の造反者・叛徒^{注12}と考えられてきた。神仏を統治階級とする観点に立ったものである。ここでは統治階級对被統治階級という観点ではなく、非人間対人間という点から孫悟空形象を捉えたい。先に三蔵が人間の代表であることを述べたが、それに対するものとして非人間の代表孫悟空が存在するのである。

それでは、孫悟空は非人間世界における修行の完成者であるかといえそうではない。不老不死になりたいという自己の欲望が動機になった第一次求法の旅は、須菩提祖師に師事することによって、技術的には殆ど完成されたといつてよい。しかし、修行未完成の部分として、心の問題、精神面の修行が残された。須菩提祖師が「爾這去、定生不良」(第二回)と予言した通り、場面は修行時代から大鬧天宮へと展開していくのである。己が能力に慢心し、そこから自己中心的な、力による能力主義の方向へと進む、即ち神仙への道を誤り、途中で妖魔への道に踏みこんでいつてし

まったのである。力を信じる者には力を以てこれを制するしかない。悟空には緊箍児が与えられた。

悟空の第二次求法の旅、即ち取経の旅は、互いに世界を異とする三蔵を師とすることによって、価値観を改めさせようとした神仏の意志により、仕組まれたものであった。第十四回の六賊、第五十六回の草寇、第九十七回の寇家の賊と、悟空の賊への対処法を見ていくと、皆殺しにして持ち金まで奪っていたものが、次には見せしめの為に二名殺生するにとどまり、最後には定身の法を使い最終的には賊を逃がすというように、三蔵の教えを体得し妖魔としての性格が薄れていくのがわかる。修業未完成のまま須菩提祖師のもとを去ったことによって生じた妖魔としての性格は、人間三蔵という弱者を守るといふ他者を交えた修業の中で克服され、修業の未完成だった部分が組み立てられていったのである。心の持ち方の変化の結果、力による調伏の象徴であった緊箍児は不要になり、自然消滅する。かくして心技兼備の非人間世界の代表者にふさわしい形象となったのである。『西遊記』における悟空像の変化は、彼が取経の旅を通じて、いかに自己改善を成し遂げていったかを描いたものと理解できるのである。

三 三蔵法師一行の周辺

ところで、『西遊記』には実に様々な形象が登場する。釈迦如来や観世音菩薩を中心とした仏教的なもの、玉皇大帝や元始天尊、太上老君などの道教的なもの、妖怪や精、その他に国王・官人・僧侶・道士・商人・漁師・木こり・農民・賊などのあらゆる階層の人間が描かれている。これら多くの形象を登場させることによって、『西遊記』の舞台空間は非常に広範囲なものとなっている。平面的には四大部州^{注13}のうちの東勝神州・西牛賀州・南瞻部州の三州にまたがるものであり、立体的には天上界から地上界・幽冥界・水界に及ぶ。ここでは、それらが集約された舞台空間といえる三蔵法師一行の取経の旅路に焦点をあてて、あちこちに散在する人物形象を一行とのかかわりあいにおいて捉えてみたい。これらの形象を、神仏・人間・動物・妖怪の四群に分け、各話における組み合わせを追ってみることにする。

その前に、これら四群の性質について簡単に述べておく。

第一群の神仏は、総じて一行の援助をするものである。妖怪を派遣して一行の妨害をさせることもあるが、一行が経を得るに足る存在となる為の試練を与えたものとされている。妖怪の行き過ぎた行為は、管理者神仏の手を離れた従者が己の自由に振舞っていることに起因しており、神魔^{注14}一体と考えることはできない。妖怪の行為は神仏の意志と考えると早計である。

第二群の人間と三蔵法師一行との関係は、三つに分けて考えることができる。即ち、①一行を援助してくれる人々、②一行に助けてもらう人々、③一行を妨げる人々の三つである。①の人々は一行にとってプラスに働くことから考えて神仏の働きに近い。劉伯欽や西梁女国の老婆のように一行の苦難を救ってくれる人々、楊家や寇家のように宿泊の労をとったり齋を整えたりしてくれる人々がそれである。②の人々は多種多勢である。烏鷄国王・朱紫国王・比丘国王また郡侯などの国王級、百花羞や天竺国公主などの姫、車遲国・鎮海禪林寺・金光寺の僧侶、高太公・通天河の陳家・駝羅莊の人々・比丘国の人々などの一般庶民、が数えられる。全て三蔵法師一行による救いを待っている人々で、一行の働きによって苦難の中から救われている。それらの苦難は殆どの場合、妖怪が人間世界に干渉してきたところに原因があり、一行は非人間的要素を人間世界から追放し、人間世界と非人間世界という二つの世界のもつれを正す役割を担っている。③の人々は、六賊・草寇・金池長老・滅法国王などである。自己の欲望にまかせて一行を妨害するという点において、人間の中で最も妖怪に近い性質を備えている。

第三群の動物は、両界山の猛虎・長蛇などの、精となっていないものを指す。活躍の場は常に限られているが、これも妖怪の前

身というべきものたちである。

第四群の妖怪は、一般に三蔵法師一行を妨害する立場にある。三蔵を手に入れて不老長寿の身になりたいからである。自らの欲望を遂げる為に、人間にはない特殊能力を使用する。

神仏と妖怪はともに特殊能力を使用する。両者の区別はどこでつけられるのだろうか。変化の術を使用できる為、外見から判断することはむずかしい。両者の区別は特殊能力の使用目的においてなされるべきである。特殊能力を用いる時自己目的に使用するものが妖怪、他者の為に使用するものが神仏である。ゆえに両者が常に対立しなければならないという理由は、必ずしもないのである。^{注15}ただ、妖怪の自己目的的な能力使用の結果、救済されなければならぬ対象が生まれた時、両者は対立関係に立つといえるだろう。妖怪に言わせれば、神仏は干渉する対象ではなく、干渉を加えてくるものである。

それでは、以上四群と三蔵法師一行との組み合わせを、取経の旅路における各話についてみていくことにしよう。

三蔵法師一行が遭遇する難について考える時、はじめに問題になるのが一般に九九八十一難と呼びならわされている難の数え方である。第九十九回諸神が観世音菩薩に伝えるところによる難の数八十は、三蔵が受けたもので、取経以前に既に四つの難を経、

その後は物語の進行のポイントを順に押さえていったものである。一見数を合わせる為に一つの難をいくつにも分割しているのだと見えないこともないのだが、話の流れ、展開を追っているという意味では妥当な計数方法であると思われる。しかし、ここでは繁雑さを避ける為に、ある妖怪なら妖怪に阻まれてそれを乗り越えるまでを、一つのまとまった話として考えることにした。取経の旅における難を考えるのであるから、それ以前の三蔵の体験した難は省略する。そこで、通し番号四十七までに分け、各々に名称をつけた。^{注16} 前述の各話というのは、これら四十七の話を目指す。

取経のお膳立てが神仏によってなされ、締めくくりが同じく神仏によってなされていることを考えると、取経の旅の始まりと終わりが、三蔵法師一行——神仏、の図式から成り立っていることは明白である。取経の旅の発端には太宗などの人間が介入しているが、三蔵法師一行という一つのグループとしては、孫悟空・猪八戒・沙悟浄・白馬までを含めて考えなければならぬから、三蔵法師一名が太宗という人間を介して観世音菩薩に出合う構図も、全体として見れば、三蔵法師一行——神仏、の図式に適合するといえることができる。取経の旅を貫く図式の両端定まった。ところで、その中間はどのようなになっているのだろうか。四十七の難を、一行にとって考えられる八種の関係のいずれかに分類し、十番毎

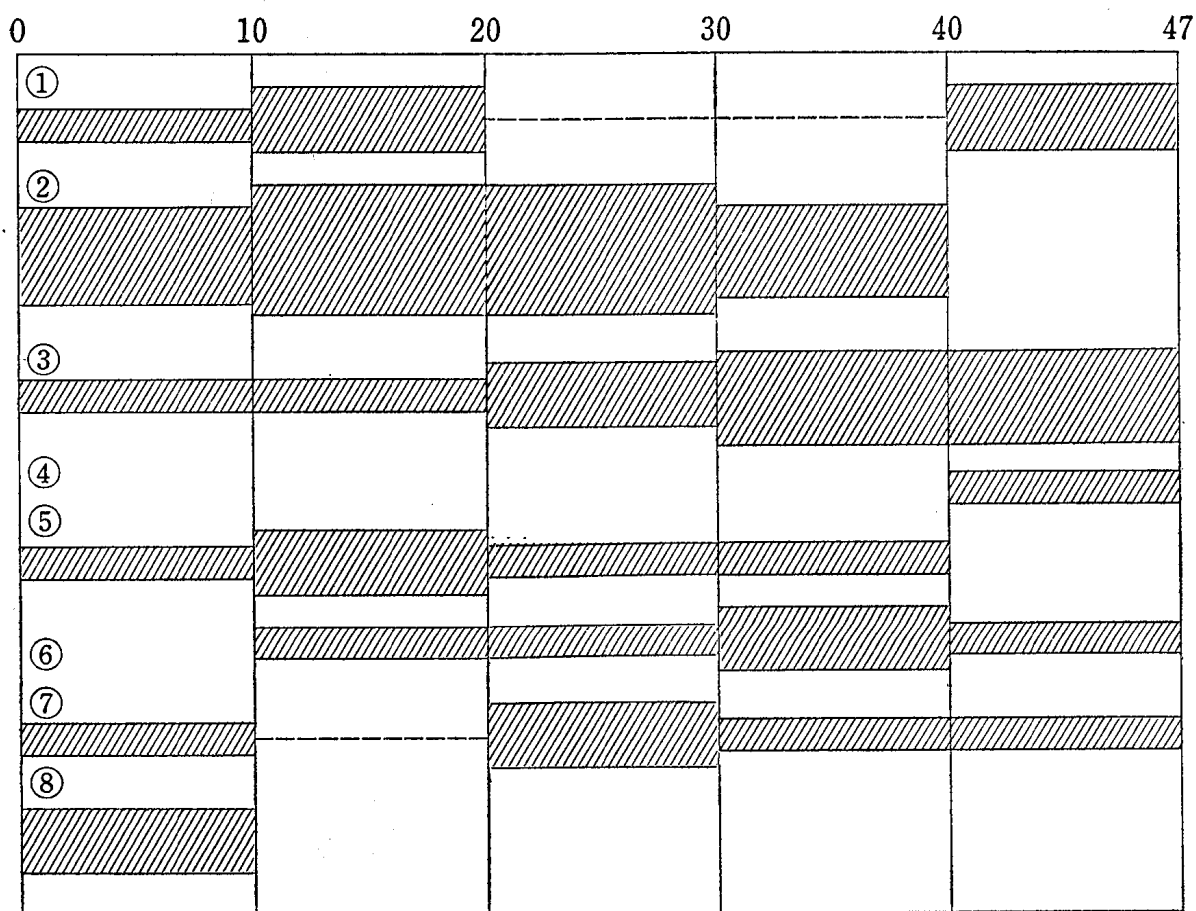
に分け進行に沿って図示した。

図Iによれば、⑤⑥⑦は前半後半を通じて一貫して存在している。これらは取経の旅の進行に従う変化が殆どみられず、いずれも神仏とは関係がないものばかりである。三蔵法師一行と、妖怪、人間、の組み合わせにおいては、取経の旅の進行に伴う変化に重点がおかれているとは言い難い。

それでは、神仏が関係してくる場合はどうか。神仏が関係してくるのは①②③④の四種類で、①に始まり①に終わるというその間に、実に興味深い傾向が見出せる。すなわち、旅の進行に従って、②↓③↓④の流れがあり、神仏は終始一貫して三蔵法師一行と関係を持ち続けているが、組み合わせる要素が妖怪から人間へと移行しているという事実である。⑧についても、動物が精となったものが妖怪であるということを考えれば、動物は妖怪の前身であるといってよい。妖怪の前身である動物から妖怪へ、妖怪から人間へという組み合わせの移りかわりが見られるのである。これはどのような意味を持っているのだろうか。

四 三蔵法師一行

一行が経る難が持つ意味には二つの側面がある。即ち取経の決意の程をはかり、苦難を経る毎に経の価値をより一層強調してい



- ① 一行一神仏 ⑤ 一行一妖怪一人間 <図I>
 ② 一行一神仏一妖怪 ⑥ 一行一妖怪
 ③ 一行一神仏一妖怪一人間 ⑦ 一行一人間
 ④ 一行一神仏一人間 ⑧ 一行一動物

くという面と、庶民等の難を除くと同時に人間世界と非人間世界の秩序を保つという面である。前者は受動的、後者は積極的意味を持つ。取経の旅の前半において妖怪が大きな比重を占めているのは、妖怪の側から三蔵法師一行に対して何らかの交渉を持つてくるという場合が多いためである。そういう意味で、取経の旅の前半は一行にとって受動的な難が多いといえる。

一方、三蔵法師一行が他者の為に難を決してやったという積極的意味を持っている話を取り出してみると、次のようになる。

8 高老荘	14 碗子山	16 烏鷄国
19 車遲国	20 通天河	
28 祭賽国	31 稀柿衞	32 朱紫国
36 比丘国	37 無底洞	40 鳳仙郡
42 金平府	43 布金寺	

天竺まで残るところ五万四千里という、全行程十万八千里の中間点にあたる通天河を基準に前半後半に分ければ、前半に比べ

後半にこの種の話の多くなっていることがわかる。鳳仙郡が天界即ち神仏と人間の問題であるのを除けば、その他は全て人間と妖怪の問題である。つまり、取経の旅が進むにつれて、妖怪に干渉されるという受動的立場から、人間が関与してくることにより、妖怪によって虐げられている人間を救うという積極的立場へと、三蔵法師一行は移行していつているのである。四十七回に亘る難を経ることによって、妖怪によって苦しめられる立場から、妖怪によって苦しめられている人々を救う立場へと、三蔵法師一行は変っていった。取経の旅が進むにつれて、一行は成長していき、神仏の課した難を受動的に受けとめるだけでなく、他者の難を救済していくという積極性を持つようになっていったと言えることができる。

五 九九八十一難

それでは、三蔵法師一行を待ちうける数々の難の内容自体はどのようなになっているのであろうか。取経の旅における四十七の難の変化を追うことによって、それらが何を描こうとしているのかを見ていきたい。

妖怪が宝物を持っているか、また得意技を持っているかを追っていくと、第七十四回から七十七回までの獅駝国を境として、以

後宝物も得意技もなくなってしまふ。全体として、孫悟空と妖怪の戦いの描写は続いていくのだが、戦いの描写を活気づける要素である宝物と得意技が見られなくなる。それ以前は、戦いをより一層興味深いものにする為に、妖怪に孫悟空さえかなわない独特の技や宝物を持たせて対戦させることで、いかに孫悟空が劣勢を乗り越え妖怪に打ち勝つことができるか、という点に焦点を絞っていたものである。ところが、妖怪——三蔵法師一行、に人間が入ってくることにより、武力を使用しない解決が見られるようになった。

『西遊記』には孫悟空の武勇伝といった面があるので、一難の解決の描写は孫悟空と妖怪との戦いのかけひきが主になっている。孫悟空と妖怪との戦いの鮮やかな描写、言葉のやりとり、武力や変化の術の様子などが中心に据えられている。それに加えて妖怪の所有する特殊な武器、技、宝物などへの興味が増えられ、超人的な力や術と、この世ならぬ品物の数々によって、場面が一段と盛りあげられている。

ところが、このような中にも全く武力に頼ることなく解決に至ったものが、少ないながらも数えられるのである。

1	双叉嶺	11	四聖試禪心	23	西梁女国
38	滅法国	40	鳳仙郡	44	地靈界

孫悟空が登場する以前の双叉嶺を除いては、人間と神仏に関わる難で、殆どが妖怪の関係しないものである。そして後半になると前半に示された戦いそのものへの興味が、急速になくなっていくのがわかる。人間に対しては武力を用いず対処し、宝物や技への興味が薄れてしまうのだ。三十五番の妖怪の国獅駝国を過ぎて、話の内容が対妖怪の戦い中心から人間色強調へと変化すると、それに伴って妖怪も幾分人間的になり、人間世界の規則に従ったり、自由気ままに自己目的のためのみに活動することを否定したりするようになるのである。^{注17}

取経の旅を通じて、孫行者の活躍を中心にした戦いのおもしろさを描いていることに変わりはない。しかしながら、妖怪の総決算ともいべき妖怪の国獅駝国が描かれたあと、比丘国からは人間色が濃さを増してくるのである。人間に対して三蔵法師一行が負の方向に働くということは基本的にはないので、人間色が濃くなっていくにつれ、人間から見た一行は、より神仏化することになる。一行は、他者の為に自己を生かすという神仏的な働きをしているのである。大筋として『西遊記』における取経の旅を見ると、そこには十二番までの神仏色から十三～三十五番の妖怪色を経て三十六番から人間色となり、四十五番の凡胎解脱に

よって一行の中の人間的要素が消滅して、再び神仏色に回帰していく、という図式が成立しているように思われるのである。

戦い中心の孫悟空の武勇伝的内容から、悟空が弱気になる描写^{注19}、妖怪の自己反省^{注20}にみられるような人物形象の典型化の崩壊を通じて、戦いの描写に合わせられていた焦点が、他へ移しかえられたといえないだろうか。たとえば、三十九番の隱霧山における眠り虫を使った性急な解決は、魔王との対戦の妙味から難を解決すること自体に話の焦点が移っていることを示すと考えられよう。また、四十三番布金寺における百脚山のムカデの精の話が簡単にすまされているのは、(もとは三十四番黄花観と何らかの関連があったのかもしれないが)妖怪退治よりも人助けの方に中心が置かれている為である。

三蔵法師一行の人助け行為、神仏的な力の使用が後半になってみられるのは、話の主題が武勇伝から救済物語へと変化していったためであろう。孫悟空を中心とした妖怪との戦いへの興味から、妖怪と戦うこと自体よりも、妖怪を退治することによる人間救済へと視点が移っている。それとともに、三蔵法師一行に課せられた難も、一行自体を苦しめるものから人々の苦しみを救わせるものへと、全体的にみてその性質が変化しているのである。

六 観世音菩薩との関係

最後に、こういった三蔵法師一行の働きを、神仏、特に一行と関係の深い観世音菩薩と比較してみたい。

観世音菩薩は紀元前後の大乗仏教成立のころ現れたものである。如来が悟りきった存在であるのに対し、菩薩は自らも悟りを求めて努力する傍ら、如来と俗人大衆の間に立って大衆を導くつなぎの役割を持っている。教理を説くのが如来、実践面を受け持つのが菩薩であると言うことができる。

『西遊記』における観世音菩薩の働きも同様である。如来が南贍部州へ取経の人を尋ねに行く者を求めた時、名乗り出たのは観世音菩薩であった。如来自身は姿を変じたり人々の前に現れたりすることはしない。それに対して、観世音菩薩は如来と東土の人々との間を取り持ち、取経の一行に対しても功成るまで見守り、時には助言もしている。通天河で俗人の前に現れたこともある。

その主な働きは、大きく二つに分けて考えることができる。一つは取経のお膳立て、取経の旅の開始に当たり必要な準備として弟子を収め東土に赴くなどの役割であり、二つ目は取経の旅における三蔵法師一行を見守ることである。ここでは後者、観世音菩薩と一行の関係を、取経の旅程に従ってみていくことにする。

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
回	13	13	14	14	14	15	16	18	20	22	23	24	27	28	32	36	40	43	44	47	50	53	54	55
名称	双叉嶺	猛虎	猛虎	六賊	緊箍	鷹愁澗	觀音禪院	高老莊	黃風嶺	流沙河	四望試禪心	五莊觀	屍魔	碗子山	平頂山	烏鷄国	枯松澗	黒水河	車遲国	通天河	金嶺山	子母河	西梁女国	毒敵山
請助力						○	○			○		○					○			○				
その他						○					○													
主な働き	授緊箍。 収白馬。 収黒風怪。					収悟淨。 美女に交じ三蔵誘惑。 人参樹起死回生。					収紅孩児。					収靈感大王。								

番号	回	名称	請助力 その他	主な働き
25	56	誅草寇	○	解決不能。
26	58	假猴王		
27	59	火焰山		
28	60	祭賽国		
29	61	荊棘嶺		
30	62	小雷音寺		
31	63	稀柿衢		
32	64	朱紫国		
33	65	盤糸洞		
34	66	黄花觀		
35	67	獅駝国		
36	68	比丘国		
37	69	無底洞		
38	70	滅法国		
39	71	隱霧山		
40		鳳仙郡		
41		玉華州		
42		金平府		
43		布金寺		
44		地靈県		
45		凌雲渡		
46		白紙経卷		
47		通天河		

△表Ⅰ▽

取經の道のりは十万八千里である。取經の旅路の中間点となっている通天河を基準にして、前半後半に分けてみると、歴然とした差が現れてくる。前半において三蔵法師一行が觀世音菩薩の助力を願ったのは六回にも及ぶのに、後半になると二十六番の假猴王の時一回だけしかない。それも觀世音菩薩には解決できない問題であったのだ。真の悟空と實物を判別して決着をつけることが出来ず、最終的には釈迦如来を頼ることになった。つまり、觀世音菩薩が依頼された要求に対して直接解決を与えているものは、前半に集中しているのである。これは何を意味するのだろうか。

觀世音菩薩の度重なる活躍場面について、入谷仙介氏が「アテネIIオデュッセウス・モティーフ」を指摘しているのが興味深い。

「西遊記」「オデュッセイア」「アエネーイス」「古事記」の比較により、私は一つの神話的モティーフを発見したと信ずる。

すなわち流浪の英雄が、最高神の信頼あつく、神徳高い處女神または母神のあつい保護のもと、千辛萬苦をしのいで祖国に帰る。女神は英雄を援助するにあたり、凡人には姿を見せず、しばしば他物に化身する。^{注21}

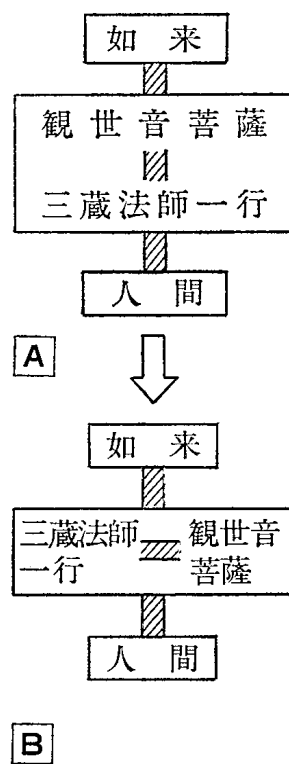
中国では觀世音菩薩の女性化が行われており、^{注22}『西遊記』の中でも「該他一世無夫(第三十五回)」という悟空の発言から、觀世音菩薩が女性であるという考え方が取り入れられていることがわか

る。しかし、三蔵法師が英雄といえるかどうかは疑問である。人間から見れば英雄であっても、如来や観世音菩薩から見れば必ずしもそうとはいえない。三蔵法師に定めとして艱難辛苦をなめさせる為に、金角銀角のような妖魔を派遣したりしているのだ。『西遊記』を検討するに当たっては、「母神のあつい保護のもと」という点に注目したい。

三蔵法師一行は、各々皆観世音菩薩の導きに従って取経の一員となったのである。観世音菩薩の第一の働きによって、彼らは榮光ある第二の人生を歩むことになった。各々にとって取経の旅は再生の過程であったといえる。また同時に、一行自体が唐の国という人間世界と靈山という非人間世界とを経によって結びつける役割を持っていたことから、取経の旅は二つの世界を結びつける過程であったともいえる。これは、観世音菩薩の任務でもあった。観世音菩薩は、人間世界と非人間世界との介在者の役割を持っている。両世界出身者の混成集団である三蔵法師一行が、観世音菩薩の手足となって、実際の行動を果たしていく。一行の中の各人は観世音菩薩に導かれたという過去を持っている。つまり、観世音菩薩は三蔵法師一行にとって、人間世界と非人間世界的世界の介在者としての母たる位置にある。

表Ⅰにおいて、前半部に三蔵法師一行が観世音菩薩の助力を請

うことが多いということは、未だ母たる観世音菩薩の庇護下に置かれて、観世音菩薩からの自立がまだなされていないということを表しているとはいえないだろうか。それが後半に入って観世音菩薩が難の解決に直接かわらなくなるのは、すなわち三蔵法師一行が観世音菩薩の手を離れて自立の途についたということだろう。そして、功成った後に、三蔵法師と孫行者の二名は仏となり、観世音菩薩よりも上の位置につくことになる。図に表すならば次のようになる。



〈図Ⅱ〉

前半部通天河までの各形象の関係は[A]のようであったが、後半部は[B]のようになる。介在者の枠内にある観世音菩薩と三蔵法師一行の関係は縦から横へと変化し、殆ど対等の位置関係となった。功成った後に三蔵法師と孫悟空が仏となるということも、一行の取経の旅が実は菩薩としての役割を担っていたのだということを示している。菩薩は仏の一手手前の段階だからである。

要するに、取経のお膳立てをした観世音菩薩は、前半部においてこそ依然として菩薩としての役割を行うが、取経の旅の後半部においては、三蔵法師一行に自らの役割を委任しているのだといえる。三蔵法師一行が、神仏の課した難を受動的に受けとめる姿勢から、他者の難を救済していくという積極的姿勢に転じたのは一行自体が菩薩となっていたということであろう。

結び

人間世界と非人間世界という二つの世界に分けて、三蔵法師一行という単位を中心に取経の旅の過程について考えると、人間世界の代表である三蔵法師と非人間世界の代表である孫悟空が、共に修行の足りない部分を補いながら次第に完成者となっていくのがわかる。三蔵法師一行自体も、それと同時に観世音菩薩の保護下から脱し、自ら菩薩として人間世界と非人間世界の間を仲介し、人々の難を救済するという積極性を持つようになっていくのである。

経を東土にもたらすことによって罪深い人々を救い、水陸大会を成功させて冥界の孤魂を救おうというのが、取経の目的であったはずである。しかし、第九十八回釈迦如来の言うところによれば、「那方之人、愚蠢村強、毀謗真言、不識我沙門之奥旨。」と経

を伝えたところで大して効果はないであろうことをほのめかしている。これは釈迦如来の口を借りた社会批判でもあるが、東土衆生を救うためというのが表向きの理由でしかないことがわかるのである。東土衆生が經典によって救われたという記述は何もない。東土衆生との接点になっている三蔵法師と、釈迦如来と接点を持つ孫悟空の両者が中心となって、三蔵法師一行という一つの単位を動かしていく中で、また一行自体が成長していくという点が問題になっているのである。東土の衆生を救うことよりも、救う為の努力をする実践者を重視しているのだ。ゆえに、三蔵法師一行を構成する一人一人が全て、罪障の償いの為に取経の旅に参加しているという前提が必要となってくるのである。罪深いという点では、一行各々と東土衆生は共通している。罪ある者が罪ある者を救う。実践の中で、目的とする行為を果たすにふさわしい者へと自己を改善すればよいのである。

取経の旅は大乘の經典を得る為のものであったが、取経の一行自身は旅を経ることによって大乘の教法を体得した。『西遊記』は孫悟空の目覚ましい活躍もさることながら、三蔵法師一行の取経過程における成長を描くことによって、目標に向かって努力を継続することが大切だと説いていると言えよう。

注

注1 三蔵法師一行については「僧行六人」とあり、これに猴行者が加わって七人となる。

注2 『西遊記』は長春真人邱処機の作と考えられていたこともあるが、彼の『西遊記』は元の太祖が西征した時参軍した西行の記で小説ではない。魯迅が呉承恩を作者であると指摘してから、呉承恩作者説は定説となり、中国では西遊記研究の一環として呉承恩研究がなされてきた。一方、日本では小川環樹氏が『西遊記』原本とその改作』（『中国小説史の研究』岩波書店一九六八年）で呉承恩が作者であるという決定的論拠がないことを指摘しており、多くの研究者も同様の立場に立っている。近年中国においても、章培恒「百回本『西遊記』是否呉承恩所作」（『社会科学戦綫』一九八三年第四期）、張静二「有關『西遊記』的幾個問題・撰者是誰的問題」（『中外文学』一九八三年第五期）等によって、呉承恩作者説に対して疑問が投げかけられている。

注3 磯部彰「『元本西遊記』の形態について」（『富山大学人文学部紀要』一九八四年二月）等。

注4 張天翼「西遊記札記」（『人民文学』一九五四年二月）胡念胎「西遊記是怎样的一部小説？」（『讀書月報』一九五六年一月）等。

注5 劉士昀「也談『西遊記』中的孫悟空形象——兼評研究『西遊記』的方法」（『思想戦綫』一九八二年第五期）

注6 鈴木陽一「西遊記における人物形象の再検討（一）——三蔵法師——」（『松山商大論集』一九七九年十月）

注7 因為汝不聴説法、輕慢我之大教、故貶汝之真靈、転生東土。（一
百回）とある。

注8 第二十七回「三打白骨精」等。

注9 第八十一回「鎮海禪林寺にて」等。

注10 何其芳「胡適文学史観点批判」（『人民文学史』一九五五年五月）

注11 周中明「應該怎樣看待孫悟空」（『文史哲』一九八二年第六期）

注12 張天翼前掲論文。傅繼俊「我对『西遊記』的一些看法」（『文史哲』一九八二年第五期）丁黎「從神魔關係論『西遊記』的主題思想」（『學術月刊』一九八二年第九期）

注13 世界は、東勝神州・西牛賀州・南瞻部州・北俱蘆州の四大州に分かれていたとされる。

注14 神魔一体説。童思高「試論西遊記的主題思想」（『西南文芸』一九五六年二月）超明政「也談『西遊記』中神仏与妖魔的關係」（『文史哲』一九八二年第五期）等。

注15 神魔対立説は次の二つの立場から述べられている。一つは封建統治階級と被統治階級との対立と考えるもので、張天翼前掲論文や傅繼俊前掲論文等がある。もう一つは社会の光明主義の力量と暗黒邪惡勢力の対立の象徴と考えるもので、陳澈「論『西遊記』中神仏与妖魔的対立」（『文史哲』一九八一年第五期）同「再談『西遊記』中神魔的対立」（『文史哲』一九八五年二月）等がある。

注16 表I参照。

注17 第七十回朱紫国。妖怪が人間に宣戦布告状を送っている。また、第八十九回玉華州。黄獅は宴会用の家畜を城に買いに行かせた。第七十回朱紫国。有来有去が、城地を攻めとることを天の理にも
とると言っている。

注19 第六十六回小雷音寺。「我如今愧上天宮、羞臨海藏、怕問菩薩之原由、愁見如来之玉象！」また、第七十七回獅駝国。「到城迎、不敢戰、正是、單絲不綫、孤掌難鳴！」

注20 注18参照。

注21 入谷仙介「女神と放浪者——西遊記のモチーフについての一考察——」（『吉川博士退休記念中国文学論集』所収。筑摩書房一九六八年）

注
22

観世音菩薩は、元明清時代に「観音娘娘」「送子娘娘」とも呼ばれていたという。井ノ口泰淳・鳥越正道・頼富本宏編『講座密教文化3密教のほとけたち』（人文書院一九八五年）所収、頼富本宏「慈悲の代表——観音菩薩」等。

（むしゅ あきこ 昭和六二 日文卒）